

2020年の初めに

2020.01.20 守山裕次郎

平成の30年余りが終わり、新たな令和の時代が始まった。この機会に改めて昭和の時代、平成の時代を振り返るとともに、令和の時代を展望してみたい。

1. 昭和～平成時代を振り返って

昭和に入って初期の20年間は日本の歴史上最大の苦難の時代であった。米国からの強い圧力で大東亜戦争に突入、結果国土は破壊され、広島・長崎に核爆弾が落とされて敗戦に至った。東京も焼け野原となり、当時目黒にあった我が家でも、一時「五右衛門風呂」に入った記憶がかすかに残っている。

しかしながら戦後の復興は目覚ましく、敗戦から僅か19年後「東京オリンピック」が開催できたのは、奇跡と言っても過言ではない。オリンピック開会式当日（10月10日）、代々木スタジアムの紺碧の上空に、自衛隊ブルーインパルス5機が五色の輪を描いたが、それを自宅の窓から眺めたのが懐かしい。なお同じ年には東海道新幹線が開通、これらをステップに、更にその後の高度経済成長へと繋がった。

このように昭和の時代とは、初期の20年間は戦争への突入と敗戦、続く20年間は廃墟からの復興、残りの20年間余りは高度経済成長と、それが究極のバブルにまで膨らむ過熱経済に至る歴史であり、わずか60年間余りで、「地獄と天国」両方を経験した波瀾万丈の極めて特異な時代だった。そして平成の時代となり、究極にまで膨らんだバブルが一挙に崩壊、その反動による余波が令和の今日まで続いているのが実態である。

このように戦後の日本は右肩上がりの経済成長を遂げ、国民の約8割が中流意識を持つ暮らしやすい世の中になった。給料は毎年確実に上がり、土地を持てばこれも確実に値上がりする「土地神話」が結局バブル発生に繋がったが、振り返ってみると、昭和の終わり頃は「国民総フィーバー状態」の極めて異常な世の中だった。なお「山高ければ谷深し」と言われるように、このバブル景気の反動は半端ではなかった。例えてみると、土地や株の値上がりで「あぶく銭」が突然入り、それに浮かれて連日連夜「飲めや歌えや」の酒宴を開いて踊りまくっていたところ、ある日突然バブルが崩壊、気がつけば株や土地が値下がりし、大借金を抱え込んで路頭に迷う事態に至ったようなものである。

この経験から学ぶべきことは、人生「勝って奢らず、負けて腐らず」何事も「一喜一憂」せず、自分の信念に従い、常に「清く・正しく・美しく？」生きることなのだろう。

2. 戦後70年余り生きて思うこと

戦後民主主義の虚構：その1）憲法改正問題

戦争で焼け野原となった廃墟から立ち上がり、それからわずか19年間でオリンピックを開催、最後はバブル景気に酔いしれるまでになった経済発展と引き換えに、戦後日本人が

見失ったものは実に多い。その最たるものは、目先の暮らしだけに目を奪われ、最も重要な課題である国家安全保障への問題意識が全く欠落したことにある。

先の大戦で、日本人の優秀さを心底知ることになった米国が、二度と彼らに立ち向かうことがないよう、マッカーサー率いる GHQ の指示で、僅か1週間あまりの短期間で作ったのが現行憲法である。その矛盾に満ちた中身につき、75年近くなっても「不磨の大典」として、国会でまともな議論さえしない、させないこの現状は一体何なのであろうか？

先日知ったが、「国家と道徳」(令和新時代の日本へ)との著書がある。その中に日本国憲法について論じた部分があり、憲法改正が必要な理由について次のように論じている。

「この憲法は不道徳の極みだからである」：具体的に一例だけ挙げてみよう。憲法9条を素直に読んでみれば、自衛隊の存在が違憲の存在に思われてしまうはずだ。戦力を否定する憲法がありながら、自衛隊が存在できるのは考えてみれば不思議な現象である。著者はこれこそが不道徳だと論じている。自衛隊に苛酷な仕事をさせるだけさせながら、「だけどあなたは憲法違反の存在だから、協力はしません」というのですから、これほど不道徳な話はありません。→ まさに正論であり、それでも憲法改正の議論さえしない国会の怠慢と、それをサポートする多くのメディアは、この指摘にどう答えるのだろうか？

※1月17日、阪神淡路大震災発生から25年が経過した。あの時、兵庫県知事が自衛隊に救助を求めていたら、どれだけの命が助かったか・・・と改めて考えさせられる。ただしこれが自衛隊拒否反応への厳粛な結果である。

戦後民主主義の虚構：その2) 政治家の劣化と墮落

かつての高度経済成長時代、我が国は「経済は一流、政治は三流」と言われた。それが時を経てこのランクが徐々に下がり、今では残念ながら経済は二流、政治家も与野党含め更に一段階ランクダウンしたのは間違いない。

現在進行形の IR 誘致に関する収賄容疑で、5名の国会議員の名前が挙げられている。中国企業による我が国への不当な進出の幫助が目的のようで、彼らは「売国議員」と言われても仕方ない。国益を守ることが国会議員の使命との信念など全くなく、わずかな金で国を売っている自覚さえない実に情けない連中である。

一方で、野党議員のお粗末さもここにきて極まった感がある。2年前に例の「モリ・カケ」騒動で国会を空転させ、「大山鳴動ネズミ一匹」だったが、懲りずに今度は「桜を見る会」騒動である。年々参加者が増え、選考基準が曖昧なものも事実のようなので、1年間は休止にし、基準を見直せば良いだけの話である。まさか闇に紛れての怪しげなイベントでもなかりょうに、参加者名簿が破棄されたと聞いた途端に、野党議員団が処理したシュレッダーの現場を検証したとの「パフォーマンスニュース」を知った時、我が目と耳を疑った。

加えて年末からは、立憲民主と国民民主が再び合流するのしないの、吸収になるのならないので揉め、合流希望の絶滅危惧政党「社民党」など、任期が来ているのに党首選さえできないお粗末な状況である。いずれにしても国内の経済問題をはじめ、北朝鮮の脅威、

中国問題、米国～イラン情勢等々、議論すべき問題は山ほどあるのに、この実態である。野党がこんな「体たらく」なので与党に緩みが生じ、「売国議員」までもが発生する悪循環だが、それも最終的には我々有権者の責任であることを肝に命ずべきであろう。

戦後民主主義の虚構：その3）官僚制度改革の限界

2001年の省庁再編に伴い諸官庁は1府12省庁となり、その後防衛庁が防衛省に昇格し今日に至るが、巨大組織故にそれぞれまだ多くの改善課題が残されている。すべての省庁についての考察はスペースの関係でできないが、以下4省庁に絞って感想を述べたい。

- 財務省：森友学園問題で元理財局長が文書改竄を指示したことが判明し、信用を大きく失墜させた。加えて事務次官によるテレビ朝日女性社員へのセクハラ事件が発覚し辞任に至ったが、かつての財務省では考えられないお粗末で恥ずかしい実態をさらけ出した。なお財務省は、絶大な権限が集中する弊害が益々顕著になっており、歳入庁としてその一部を分離した組織に改編することで、大きな財政メリットが期待できるだろう。
- 外務省：とにかく対外交渉力に乏しいメンバーの組織である。（「お公家さん集団」とも呼ばれる）拉致問題は数十年間経っても解決できず、対中国・対韓国との交渉でも先方ペースに乗せられるままで、朝日新聞のフェイクニュースに端を発して拡大した慰安婦問題も、海外にまで韓国の嘘の主張を拡散させてしまったその責任は重大である。交渉とは、顔では笑って握手しつつ、足では蹴り合うことだと、外務省は初任教育で教えていないのだろうか。
- 総務省：本来は地味な役所だが、かんぽ生命保険の不正勧誘問題で急にクローズアップされた。それにしても郵政民営化とは一体何だったのだろうか？小泉元総理など、原発反対運動に関わる暇があるならば、自分が種をまいたこの問題解決のため、残りの人生すべてをかけ、日本郵政改革のため汗を流すべきだろう。なお、肥大化したNHKの改革や、偏向報道の多い民放への電波オークション導入検討もこの省の重要課題である。
- 文科省：抜本的改革が急務な官庁である。戦後の我が国は経済政策を最優先し、本来はこれと同等に重要な教育行政に、真剣に取り組まなかった。現場では日教組による偏向教育が行われ、検定教科書は自虐史観的内容のものが多く、これを見過ごしてきた責任は極めて重大である。自国の歴史の反省と同時に、我が国の素晴らしさを教えずに何を教えるのか。

そもそも天下り禁止法があるのに、教育行政トップの歴代事務次官らがこれを無視し、3年前には前川事務次官がその責任を取り辞任に至った。（本来懲戒免職）彼は現役時代、新宿歌舞伎町の「出会い系バー」に通い、座右の銘は「面従腹背」だそうだが、こんな人物が教育行政トップを務める文科省とは一体何なのか！歴代文科大臣の責任は重い。かつて「ゆとり教育」で学力を低下させ、若者の人口が減る中、自分たちの天下り先を増やすため大学の新設を認め、血税を浪費してその質を落とすこの組織は、抜本改革が必要であり、萩生田現文科大臣の手腕に大いに期待したい。

戦後民主主義の虚構：その4）マスメディアの罪

政治家、官僚の劣化と墮落もさることながら、最大の責任はマスメディアにあり、その罪の深さは万死に値する。かつて SNS 等が発達する以前、我々は新聞、テレビ、ラジオを通じてしか情報が得られなかった。政治、経済、社会問題その他、彼らの報道内容すべてが正しいと信じてきた。ところがネットが発達、既存メディア報道とは異なる情報を知ることとなり、彼らは自分たちの主張に合わせたフェイクニュースを多く報道し、逆にその主張に合わないファクトニュースは報道しない恐るべき実態が明らかになった。

その罪の深さ、影響の大きさは、そこらの民間会社が起こす不祥事とは比較にならない。朝日新聞は慰安婦問題をはじめ数々のフェイクニュースを世界に向かって報道し、それを何十年間も放置し日本の名誉を著しく傷つけた。なお、産経新聞など一部メディアだけが例外的で、NHK や民放、共同通信その他も全く同様の報道姿勢である。

昨年、ジャーナリストの門田隆将氏の著書「新聞という病」がベストセラーになった。ここにも書かれているが、朝日新聞に代表されるこれらメディアは基本的に「反日」で、「日本が嫌い」なのである。中韓におもねり安倍政権を倒すことだけが目的で、憲法改正や防衛問題など、国益を守る議論から目を反らすこれらメディアは早晩淘汰されるだろう。※ネット番組「虎ノ門ニュース 8 時入り」はお勧めです。(後からも U チューブで視聴可能)

3. 令和の時代を展望する

1) AI に代表される科学技術は益々急速に発達し、5 年後、10 年後の生活環境は全く変わるだろう。そしてお金さえあれば、衣食住や娯楽を含む生活面では何不自由なく快適に暮らせるだろうが、問題は他人との繋がりである。先日、一部の方にはご紹介したが、昨年未産経新聞に掲載された「現代版新人類：ネオサピエンス」と呼ばれる「他者との絆に価値を見いださない回避型人類」が激増し、我々古い世代の「ノミニケーション」など死語となるだろう。どんなに便利でも、それで幸せにはなれないだろうに。

2) 現在も少子化は益々進んでおり、昨年の出生数は予想の 90 万人を 2 年前倒しで割り、86 万 4 千人まで減少したそうで、これは極めて深刻である。団塊の世代 (S22~24 年) は 260 万人誕生していたので、1/3 に減少した訳である。なお平成 28 年が 97 万 6 千人だったので、わずか 3 年間で 10 万人も減少したこの現実には実に恐ろしい。

将来の年金を含む国家予算は、当然ながら現役世代の人数と高齢者数の関係で決まり、平均寿命はまだまだ延びると予想されるため、財政赤字は一層拡大することとなる。

このように令和時代の最大の課題は、少子化に如何に歯止めをかけるかで、今更この現実をどうすることもできないが、遅まきながら以下の努力が必要かと考える。

- 若者には、結婚して子供を持つことが幸せに結びつくことを、説得性を持って教え込む。超高齢化社会における自分の老後を想像し、家族のいない孤独な老後生活がいかに辛いかを、幼少の頃から機会ある毎に理解させる。

○我々高齢者もこの現実を踏まえ、次世代の負担にならない生き方（ピンピン・コロリ）を目指す努力を意識して行い、高齢者福祉分を若者に回す覚悟で生きること。

3) 外交面の課題も多い。特に問題となるのは中国や韓国など近隣諸国との関係にある。

○中国：

米中関係の急速な冷却化により、中国経済の将来は極めて厳しい。加えて、香港問題やチベット人、ウイグル人への弾圧、台湾への圧力等、習近平政権の軍事力を背景とした拡張主義が益々顕著になっている。日本に対しても、尖閣諸島には連日のように公船が接近、時折領海侵犯までを行い、中国へ渡航した人が理由も分からず拘束されるなど、友好関係に戻ったとはとても思えない。そんな中、4月に習近平主席を国賓で招くなど論外であり、今からでもこの決定を見直すべきである。

○韓国：

言及するのもバカらしいが、隣国なので完全無視もできないのが辛いところである。日韓基本協定で解決済みの徴用工問題の蒸し返しその他、彼らの主張すべてが支離滅裂、根拠なしのデッチ上げで、ここまで酷い国とは思わなかったが、文在寅大統領になってその実態が露呈したことは長い目で見れば収穫とも言えるだろう。とにかく「恩を仇で返す国」で、「恥の文化が全くない国」であることを認識し、ボールはすべて韓国側にあり、我々は決して妥協することなく、彼らの対応を粛々と見守るべきだろう。

閑話休題。

カルロス・ゴーン被告が年末にレバノンへ逃亡した。我が国として、それぞれの立場での反省点は実に多い。中でも保釈を認めた裁判所、並びに弁護団の責任は極めて重大である。加えて、関西国際空港の出国管理のずさんさにも驚いた。

それにしても日産のトップ時代、トヨタの社長などに比べその報酬額の多さに驚いたものだが、それにも満足できず、更に巨額の不正を働くその根性の卑しきは、何に起因するのだろうか。

彼はレバノン人の両親のもとブラジルで生まれ、この段階で二重国籍者となった。その後母の勧めで高等教育はフランスで受け、フランス国籍も取得し、その才能を発揮してルノーにヘッドハンティングされ、日産の最高経営責任者になった。三重国籍者となり、日本や米国とも深い関係を持ち続けた彼だが、真に帰属する国、愛する国を持たなかったのだろう。国籍のあるフランス、ブラジル、レバノンも、彼にとって祖国ではなく利用できる国にすぎなかった。国など実に軽い存在で、何より大切なのはマネーであり、根無し草の彼にとり、国籍もない日本の法律を破ることなど簡単だったのだろう。

なお、どこかで聞いた次の言葉など、彼には全く通じないだろう：「落ち着かぬ・がつがつした・忙しそうな・金持ちは、ただの貧乏人よりもみじめなように思われる・・」

以上